

「通ふ」の用法

—『源氏物語』を中心として—

柳 椿 姫

キーワード：「通ふ」、類似表現、共通性、意味拡張

要 旨

『源氏物語』中に使われている「通ふ」は、①人間が実際にA地点とB地点を行き来することを表す場合、②人物Aと人物Bの心に共感が生じることを表す場合、③対象Aと対象Bの共通点を示して、結果的にAとBが類似していることを表す場合がある。

その中で、③の場合の「通ふ」に注目してみると、用例数は「通ふ」の総数86例中17例を占めており、「似る」の前提となる場合もある。また、平安時代の仮名文学作品、『源氏物語』では「通ふ」の意味拡張が見られるという点であらためて注意すべきであることを提示するものである。

一 はじめに

『源氏物語』の「早蕨」の巻に次のような文がある。

いとさかりにほひ多くおはする人の、さまざまの御もの思ひに、すこしうち面瘦せたまへる、いとあてになまめかしき気色まさりて、昔人にもおぼえたまへり。並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを、…（早蕨、p.337）

例文1は、薫の視点で中の君の様子が亡き大君に類似していることを表す場面で、傍線を施した「おぼゆ」「似る」「通ふ」に対して大部分の注釈書や辞典類では「似る」の意と解している。そのためか、先行研究でもこれらの「おぼゆ」「似る」「通ふ」をともに類似を表す表現として捉えている。その中で「通ふ」に注目してみると、小論の調査では^{注1}、平安時代の仮名文学作品の中で『源氏物語』（17例）、『宇津保物語』（2例）、『紫式部日記』（1例）、『堤中納言物語』

(1例)、『狭衣物語』(1例)、『浜松中納言物語』(5例)、『夜半の寢覚』(2例)、『とりかへばや物語』(3例)のように主として『源氏物語』の以後の作品にまれでありながら出現している。このように「通ふ」が『源氏物語』になって多く使われている理由は何であろうか。また、一般的に類似表現と言われている「似る」や「おぼゆ」との違いはどのようなものであろうか。さらに、『源氏物語』には「似通ふ」の例もあるが、「似る」や「おぼゆ」との関係はどのようなものであろうか。

小論では、『源氏物語』中の「通ふ」を取り上げ、「通ふ」が単に対象間の共通性を示すもので、場合によっては「似る」や「おぼゆ」の前提となるが、類似を表す語とは異なるレベルにあることを指摘したい。また、『源氏物語』中ではじめて「通ふ」が人物を対象とした表現にまで意味を拡張して使われていたことも提示する。

二 「通ふ」の用法

『源氏物語』中には、総86例の「通ふ」がある。それらを見ると、例えば(以下、『源氏物語』の引用は、小学館日本古典文学全集(秋山虔校注・訳、昭和57年)による。傍線筆者)、

2 いと忍びて通ひたまふ所の、道なりけるを思し出でて、問うち叩かせたまへど、聞きつくる人なし。(若紫、p.321)

のように、源氏が尼君を亡くした若紫のところへ弔いに行つた帰途に常に忍び通つた所を尋ねるといふ例がある。また、

3 いかねば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ、聖だちたまへりしあたりにて、常なきものに思ひ知りたまへるにや、と思すに、いとどわが心通ひておぼゆれば、さかしだち憎くもおぼえず。(総角、p.241)

のように、薫と大君との心の状態が通じるといふことを表す例もある。一方、

4 「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、…(松風、p.391)

5 言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて、弁してぞ聞こえたまふ。(総角、p.312)

と、惟光にとつて大堰の家の周辺のおもむきが明石の家の周りの風景と共通する点があると感ずること(4)や、中の君にとつて薫のものを言う様子が夫の匂宮と共通している点があると感ずること(5)を表す例がある。つまり、「通ふ」には、①人間が実際にA地点とB地点を行き来することを表す場合、②人物Aと人物Bの心に共感が生ずることを表す場合、③対象Aと対象Bの共通点を示して、結果的にAとBが類似しているようなことを表す場合がある。筆者の調査では、『源氏物語』には①と②の場合が69例あり、③の場合が17例ある。その中で、小論での考察対象とする③の場合に注目してみると、先行研究である藤川(1979)では、「おぼゆ」「似る」「通

「ふ」を一括して「似テイル」という表現として捉えて、「通ふ」に對しては、

6 「何ばかりの親族にかはあらむ。いとよくも似通ひたるけはひかな」と思ひくらぶるに… (浮舟 p.114)

のような「似通ふ」の場合も含めて総26例をあげている。それらを人の類似性とその他に分類して、

人と人の類似性の場合、「似通ツテイル」所は、「御けはひ」「つらつき」「まみ」等で、その辺は「おぼゆ」の特徴の一面と重なりあっている。(p.30)

と、「通ふ」と「おぼゆ」との重なる部分があることを指摘する一方、人物以外の例では、

似通っている点を、具体的に指摘できるものが十二例で、全体の半分に近い数であるのも大きな特徴であるといえよう。(p.30)

と、「似通っている点を、具体的に指摘できるもの」が「通ふ」に多いことを特徴として指摘しているが、これは「似る」の特徴としても挙げられており⁵³⁾、「通ふ」の位置づけがはっきりしない。また、例1のように「通ふ」が「おぼゆ」や「似る」の言い換えのよう⁵⁴⁾に用いられた例もあるが、これらの三つの語の関係について具体

的な説明はなされていない。さらに、例6のような「似通ふ」も「通ふ」と同じレベルにあるものとして扱っているが、「似通ふ」は、小論での調査によると⁵⁵⁾平安時代の仮名文献中で『源氏物語』にしか見られないので「似通ふ」という複合語の存在も考察の余地がある。

このように藤川氏は、『源氏物語』中での「おぼゆ」「似る」「通ふ」を類似表現という同じレベルにあることを前提として「通う」を検討しようとしたので、用例分析による数字上の結果だけを並べることには終始してしまい、「通ふ」と言い替えができそうな「おぼゆ」や「似る」との関係はどのようなものか、「似通ふ」の存在に関しては説明していないのである。すなわち、『源氏物語』中で「通ふ」の用法を検討するためには少なくとも平安時代の仮名文学作品からの幅広い検討が必要ではないか。そこで、小論では、改めて『源氏物語』中でいわゆる「似る」の意と解される「通ふ」を取り上げ、平安時代の仮名文学作品との比較を行い、その用法について具体的に説明してみたい。まず、次節では、『源氏物語』中で出現する「通ふ」の用例を整理する。

三 いわゆる「似る」と解される「通ふ」

平安時代の仮名文学作品との比較を行う前に『源氏物語』中でいわゆる「似る」の意と解される「通ふ」の例を整理してみる。

I、「通ふ」が人物に使われている場合(9例)

a)藤壺の中宮ガ桐壺更衣二通フ(以下、藤壺の中宮↓桐壺更衣

のように「示す」

「な疎みたたまひそ。あやしきよそへ聞こえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。類つきまみなど、は、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたたまふも、似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、(桐壺、p.120)

b) 小君↓空蟬

手さぐりの、細く小さきほど、髪の毛と長からざりしけはひのさま通ひたるも、思ひなしにやあはれなり。(空蟬、p.191)

c) 若紫↓藤壺の中宮

親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあはれに、見まほし。(若紫、p.287)

d) 若宮(冷泉帝)↓源氏

あさましきまで、紛れどころなき御顔つきを、思しよらぬこととしあれば、また並なきどちは、げに通ひたまへるにこそは、と思ほしけり。(紅葉賀、p.400)

e) 春宮(女三宮の弟)↓女三宮

春宮に参りたまひて、論なう通ひたまへるところあらむかし、と目とどめて見たてまつるに、にほひやかになどはあらぬ御容貌なれど、さばかりの御ありさま、はた、いとことにて、あてになまめかしくおはします。(若菜下、p.148)

f) 薫↓匂宮

言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて、弁してぞ聞こえたまふ。(総角、p.312)

g) 中の君↓大君

…うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを、(早蕨、p.337)

h) 浮舟↓大君

「…と思ひはべりしを、先つこころ来たりしこそ、あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか。」(宿木、p.438)

i) 身分が卑しい人↓大君

…これより口惜しからん際の品ならんゆかりなどにてだに、かばかり通ひきこえたらん人をえてはおろかに思ふまじき心地するに、(宿木、p.430)

II、「通ふ」が物事に使われている場合(8例)

j) 太液の芙蓉、未央の柳↓楊貴妃の容貌

太液の芙蓉、未央の柳も、げに、かよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、(桐壺、p.111)

k) 葦の生えぐあい↓難波の浦の葦

宰相中将のは、水の勢ゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるころあり。(梅枝、p.412)

l) 大堰の家のまわり↓明石の家の周辺

「あたりをかしようて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、(松風、p.301)

m) 音

…なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること三代になんたりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは棄て

△表1-V 『源氏物語』中の「通ふ」「似る」「おぼゆ」の出現状況

人物/物事	通ふ		似る		おぼゆ	
	血縁関係である場合	血縁関係ではない場合	人物/物事	人物/物事	人物/物事	人物/物事
人物	6	3	20	6	16	3
物事	3	8	13	6	6	3
総数	9	11	33	12	22	6

忘ればべりぬるを、もの切にいぶせきをりをりは、掻き鳴らしはべりしを、あやしうまねぶ者のはべるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ。(明石、p.232)

(c) 「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひたまへると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなん。」(竹河、p.65)

(o) むらさきの色↓藤の花の色
むらさきの色はかよへど藤の花心にえこそかからざりけれ(竹河、p.86)

(p) かほ鳥の声
かほ鳥の声もききしにかよふやとしげみを分けてけふぞ尋ぬる(宿木、p.93)

以上、人物(I)に使われている例が9例、物事(II)に用いられている例が8例で藤川氏が挙げてている例とは多少差がある。さらに、「おぼゆ」や「似る」の用例数と比較してみると、△表1-Vのように、全体数では「似る」↓「おぼゆ」↓「通ふ」の順で使われており、「おぼゆ」が人物に集中している一方、「似る」は人物が物事より倍にあたり、「通ふ」は人物と物事がほぼ同じく用いられている。人物の場合は、血縁関係にある者同士について「通ふ」を

使った例が a, f, i 以外の6例あり、「おぼゆ」は22例中16例、「似る」は26例中20例で三語ともに血縁関係に使用された場合が多い(藤川氏も指摘している)。また「通ふ」には~~縦~~線を施した b, f, h のように人物の「けはひ」や「ありさま」に使われるといった特徴と重なる人物の「けはひ」や「ありさま」に使われるといった特徴と重なるところがある。一方、~~縦~~線を付した a, d, j, k, l, m のように共通する点が具体的に示されている例もあり、「似る」の特徴とも重なりあうところもある^注。具体的な人物については、「おぼゆ」や「似る」と同じく、藤壺の中宮↓桐壺更衣(a)、若紫↓藤壺の中宮(c)、冷泉帝↓源氏(d)、中の君↓大君(g)、浮舟↓大君(h)のように物語中で中心人物となる人物に使われている例がある一方、小君↓空蝉(b)、女三の宮↓女三宮の兄(e)、身分が卑しい人↓大君(i)のように物語中で周辺人物となる人物の例もある。「おぼゆ」のように特に物語中で中心人物となる人物に集中するという特徴は見えない。

物事の場合でも絵、場所、作法、音、声など8例があり、1の例と同じような「おぼゆ」の例がある。

7家のさまおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。(松風、p.397)

7は、明石の家の趣と大堰の家の周辺が対象となる例で1の例といえ替えができそうな例である。それ以外の例も絵や音など「おぼゆ」「似る」と共通する物事がある。その他、「通ふ」は「けに」(d)、「論なう」(e)、「ふとそれかとおぼゆるまで」(g)、「あやしきま

で「h」など「通ふ」の程度を強調した表現がある点でも「おぼゆ」や「似る」と重なりあっている。

さらに、「通ふ」だけの用法を見ると、謙讓語「奉る」や「聞こゆ」の接続と関連して、『源氏物語』中で「おぼゆ」や「似る」には「奉る」と結びつく例しかない一方、「通ふ」には「聞こゆ」と結びつく例しかない。特に、「似る」の意と解される「通ふ」に2例が現れることに注意される^{註6}。また、和歌の例がo、pの2例あるが、oは紫が藤の花と色は共通しているところがあっても藤の花の心には手がとどかないと、表面的には「むらさき」と「藤の花」の色が共通していることを示す歌だが、内面的には薫が関心を持っていた大君（玉鬘の娘）は参院してしまう、だが、薫の心には未だに大君に対する未練を残している。それを汲み取った藤侍従（大君の弟）は自分と大君とは兄弟ではあるが、大君は私が思うとおりにはならないと薫の心をかawaiiそうに思う心情を表している例である。pはかほ鳥の声も昔聞いた音に共通しているだろうかと茂みを分けて今日ここへ尋ねてきたという歌で、表面的にはかほ鳥の声を取り上げてはいるが、そこに込められた意味としては亡き大君に共通している人（浮舟）を尋ねてここまで来たのだという薫の気持ちを表す例である。それらの「通ふ」は、表面的には「色」「声」などが共通していることを示しながら内容的には人物の様子が共通していることを含意する表現になっている。一方、「おぼゆ」の場合は和歌に使われた例がない。また、「似る」には

のように昔と今の旅衣が似ていること表現する1例があるが、「通ふ」のような内面的な意味を込めた用法として用いられてはいない。このように「通ふ」は、「おぼゆ」のように物語中の主要人物と関係する独特な用法は持つておらず、「おぼゆ」や「似る」と場面的な違いもさほど具体的に提示できないほど重なる点がある一方、「おぼゆ」や「似る」にない謙讓語「聞こゆ」と結びついた例があることや、和歌でも用いられることなどから、類似表現である「おぼゆ」や「似る」とは異なるレベルにあるものとして考えた方がよいではないかと思われる。このような「通ふ」の用法を具体的に解明するために、次節では平安時代の他の仮名文学作品との比較を行ってみる。

四 他作品に見られる「通ふ」との比較

三節で挙げたとおり「通ふ」は「おぼゆ」や「似る」と重なるところもあれば「通ふ」だけの用法もある。さらに、和歌に用いられている例が2例もある一方、散文でも人物にも物事にも偏りなしに使われている。このような「通ふ」の使い方を解明するためにこの節では他の作品（和歌集や平安時代の仮名文学作品）に現れる用例を比較しながら『源氏物語』中での用法を考えてみたい。

四・一 和歌に使われた場合

8 露けさのむかしに似たる旅ごろも田蓑の鳥の名にはかくれず
 (濔標、p.297)

まず、「通ふ」が和歌に用いられた用例を八代集からみると、『拾遺和歌集』の1例と『金葉和歌集』の2例が見える程度であり、

その他の和歌集では用例がない。それらを見ると、

9 野宮に齋宮の庚申し侍けるに、松風入夜琴といふ題を詠み侍ける
齋宮女御

四五一 琴の音に峰の松風通ふらしいづれのおより調べそめけん
(第八、雑部上)

10 源仲正がむすめ皇后宮に初めて参りたりけるに、琴弾くと聞かせ給て弾かせさせ給ければ、つゝましながら弾き鳴らしけるを聞きて、口遊のやうにて言ひかけける
撰津

五四一 琴の音や松ふく風にかよふらん千代のためしに引きつべきかな
(第九、雑部上)

返し、
五四二 うれしくも秋のみ山の秋風にうゐる琴の音のかよひけるかな
(第九、雑部上)

美濃

例9は、齋宮が松風を琴の奏樂と聞きなした歌で、琴の音と峰の松風の音が共通しているところがあると感ずることを表現している。

例10は、琴の音のすばらしさから松風を連想し、その松によつて皇后宮の長寿を予祝する歌(五四一)、その返しとして皇后のもとで初めて弾いた琴の音が秋の深山の松風と共通しているところがあつてうれしい気持ちであることを表現した歌(五四二)で、例9と同じく琴の音と松風や秋風の音がかよっていることを示している。このように和歌集に見られる「通ふ」は、「琴の音」と「松風や秋風の音」が共通していることを示す歌に限って使われ、人物間が共通していることを示す例は万葉集をはじめ、古今集などの八代集には

見られない^註。

さらに、平安時代の仮名文学の作品中に見られる和歌では『源氏物語』のほかに『浜松中納言物語』に、

11 むらさきの色に通はぬ草なれどなを一本のなつかしき哉

(p.399)

のように、紫草の色の似るところのない草であるがやはり親しみもてるものであると、表面的に紫草の色について歌っているが、内面的には北の方(師官の娘)は吉野姫と姉妹であるが、共通している点はないように見える。でも、やはり、吉野姫の一族として親しみを感ずますよと衛門督の心情を込めて用いられている。例11は、「通ふ」が否定型で用いられてはいるが、おそらく、『源氏物語』の〇をふまえた歌であろう。

このように、和歌に見られる「通ふ」は、『拾遺和歌集』『金葉和歌集』では「琴の音」と「松風や秋風の音」のように「音」が共通していることを示すところに使われ、物事間にしか用いられていない。『源氏物語』でも鳥の声に「通ふ」が用いられた例pもあつたが、oやpの例のように歌の含意に人物関係を込めた「通ふ」の例は調査した和歌集には見あたらなかった。

四・二 散文に使われた場合

次に、散文の場合をみてみると、平安時代の仮名文学作品中で「似る」は他文献にもよく見えるのだが、「おぼゆ」は『源氏物語』『狭衣物語』『宇津保物語』としかかへばや物語』にしか見えない。一方、

「通ふ」は「似る」よりは少ないが「おぼゆ」よりはやや多くの文獻に現れる。そこで、平安時代の仮名文学作品に使われているいわゆる「似る」の意と見える「通ふ」の出現状況をみると、表1-2のように整理できる(一)内の数字は人物間の「けはひ」や「ありさま」が「通ふ」と用いられている場合である)。

表1-2 仮名文学作品での「通ふ」の出現作品

作品／人物・物事	人物	物事	総数
宇津保物語	1 (1)	1	2
紫式部日記	1 (1)	0	1
狭衣物語	1 (1)	0	1
夜半の寢覚	2 (2)	0	2
堤中納言物語	1 (1)	0	1
浜松中納言物語	4 (3)	1	5
とりかへばや物語	3 (1)	0	3

表1-2で見られるように散文に使われている「通ふ」は、『源氏物語』以前の散文作品では用例が見られないが、それと同じ時期か以後の作品中にはまれでありながら出現している。また、『源氏物語』のほかには大部分が人物の場合に集中しており、特に人物の「けはひ」や「ありさま」が「通ふ」という表現がほとんどである。例えば、

12 このごろの君達は、ただ五節所のをかしきことを語る。「簾のはし、帽額さへ、心々にかはりて、いでゐたる頭つき、もてなすけはひなどさへ、さらにかよはず、さまさまになむある」と、聞きにくく語る。『紫式部日記』 p.214

13 「顔は、たゞ内の大臣にたがふ所なからむめり。気はひ・様体こそ母君にかよひけれ」と御覧じて、『夜半の寢覚』巻四、p.254)

14 御声けわひなん、もとこれは男の女まねび給しなれば、女のすくよかにつかひ馴らし給へりしなれば、もとよくかよへる御けはひ、いづくかはたがはん。『とりかへばや物語』巻三、p.263)

と、12のようにこのごろの君達が五節所の趣深いことに関して話している場面で、簾のはし・帽額・部屋の趣・出仕している女達の髪恰好・立ち居の物腰などの様子が共通している点がないほどそれぞれであることを表現する例、13のようにまさこの君(寢覚の上の娘)が顔は内大臣とそっくりであり、その様子は母君(寢覚の上)と共通するところがあることを描写する例、14のように大将と尚侍が入れ替わるところで、もともと二人の雰囲気は共通していることを表現する例などがある。このように、他散文作品に見られる「通ふ」は、「けはひ」「ありさま」とともに用いた場合に人物間の共通性を示す例ばかりで、物事間はほとんど見られない。『源氏物語』では「けはひ」「ありさま」に用いられた例は3例であったが、他作品になると用例の絶対数も少なくなっている。

では、このように「通ふ」が主に人物の「けはひ」や「ありさま」に用いられているのはなぜであろうか。これは、二節でも言及したように「通ふ」はもともとタイプ①と②で用いられていたが、それがタイプ③の意にまで拡大して用いられるようになった。すなわち、タイプ②の例である音が「通ふ」ことを契機にして、『源氏物語』中では人物の「けはひ」「ありさま」だけでなく、人物の「顔つき」

「容貌」などのような対象の具体的な点が示されるところや、漠然とした類似にまで使われたのではないか。しかし、こうした「通ふ」は『源氏物語』での紫式部の表現方法であって、「似る」の意味範囲をおびやかすまでには発展しなかったであろう。その中で、人物の「けはひ」「ありさま」が「通ふ」という表現だけが八表―2Vのように『源氏物語』以降の作品に固定した表現として残ったものと解釈したい。^{注6)}

五 「通ふ」と「似通ふ」

四節で見たように、『源氏物語』中で「通ふ」は、同時期の文献での「通ふ」の調査からみても意味の広さがあることが明らかになった。さらに、『源氏物語』には意味上類似している「似通ふ」という複合語も使われている。「似通ふ」は、小論での調査によると平安時代文献中で『源氏物語』だけに出現する。その例は3例が挙げられ、例6のほかに次の2例がある。

- 15 寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、妹と聞きたまひつ。(常木、p.174)
- 16 いと何心なう物語して笑ひたまへる、まみ口つきのうつくしきも、「心知らざらむ人はいかがあらん。なほ、いとよく似通ひたりけり」と見たまふに、…(柏木、p.314)

例15は、源氏が方違えなので紀伊守邸におもむくようになった時、すぐそばから聞こえてくるしまりのない寝ぼけの音がさつきみた衛

門督の末っ子の声に似ているのでその子の姉であろうと思う例、例16は、若宮(薫)の五十日祝いの時、源氏が薫のなにげなく何かおしゃべりしながら笑っている目もとや口つきのかわりらしさも柏木に類似していると感じる例である。このように、「似通ふ」はすべて血縁関係にある人物に使われており、人物間の具体的な共通点を認め、比較判断することによって「類似」を示す表現として用いられている。つまり、「似通ふ」は、単に対象間が共通していることだけを表す「通ふ」と対象間の比較判断による類似を表す「似る」のレベルの違いを示す例として、又は、『源氏物語』中で「通ふ」と「似る」の意をともに表現しようとする一歩踏み込んだ表現として『源氏物語』中で独自の用法で現れたことに注目したい。さらに、このような「似通ふ」が現代語にも残っているが、『源氏物語』に見える用法から現代語までつながる「似通ふ」の用法については稿をあらためて考察したいと思う。

六 まとめと今後の課題

これまで『源氏物語』におけるいわゆる「似る」の意と解される「通ふ」を中心とし検討してみた。「通ふ」は対象間に共通点があることを示し、場合によっては、「似る」の前提となるものであった。また、平安時代の仮名文学作品中、『源氏物語』では「通ふ」の意味拡張が見られるという点であらためて注意すべきである。

今後は、小論で取り上げた「通ふ」から発展して、現代語と古典語での用法のずれがあることや、補助動詞「聞こゆ」との接続に関わる問題についてはさらに検討したい。

注1 今回筆者の調査した平安時代の仮名文学作品は、『土佐日記』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『落窪物語』『宇津保物語』『蜻蛉物語』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『狭衣物語』『堤中納言物語』『更級日記』『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』『今昔物語』『宇治拾遺物語』である。テキストとしては、『宇津保物語』『狭衣物語』『浜松中納言物語』『宇治拾遺物語』は岩波の日本古典文学大系、『とりかへばや物語』は同新日本古典文学大系を用い、他は小学館の日本古典文学全集を用いた。

また、和歌集は『古今和歌集』『新古今和歌集』『後選和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』である。テキストとしては、新日本古典文学大系を利用した。

注2 藤川氏は「通ふ」と「似通ふ」を合わせて26例をあげ、人の類似性の場が14例、その他が12例と分類しているが、小論では日本古典文学全集によつて「通ふ」17例、「似通ふ」3例を挙げる。

注3 松尾(1959)、柳(1996)に指摘している。

注4 注1と同じの文献を参考にした。

注5 柳(1996)では、『源氏物語』中で「おぼゆ」は表現主体がAとBを何らかの関係で結びつける働きをし、「ゆかり」の文字として『源氏物語』の特徴を反映する独特な言い方として使われており、「似る」は、単に対象間を比較・匹敵するところに用いられることを指摘している。一方、「似る」が具体的な類似対象に多く用いられ、「おぼゆ」が人物の「けはひ」や「ありさま」のような漠然とした対象に使われていることも言及している。

注6 小論での調査によると、『源氏物語』中で「おぼゆ」「似る」「通ふ」の敬語表現をみると、三語ともに補助助詞「たまふ」と結びつく点では共通している。しかし、「おぼゆ」や「似る」には「奉る」が結びつく例がある反面、「聞こゆ」が結びつく例はない。一方、「通ふ」には「聞こ

ゆ」が結びつく例はあるが、「奉る」が結びつく例はない。さらに、「似る」と解される「通ふ」の場合だけに「聞こゆ」が結びついている(2例)。このような使い方に關しては、動詞の性質によるか偶然現れたか現段階ではよくわからないので、これからの問題として挙げたい。

注7 小論で取り扱う用例と類似したもので『千載和歌集』に次のような例もある。

・后宮にはじめて参れりける女房琴ひくをきかせ給て、よみて賜ひける
一 条院御製

六七六 琴の音の通ひそめぬる心かな待つふく風のをとらねども

注8 さらに、「おぼゆ」が人物間の初対面の場面に多く用いられるなど場面との関連性の強い性格を持つのに對し、「通ふ」には今のところそうした特徴は見いだされない。

参考文献

- 小町谷照彦(1977)『源氏物語の表現と和歌の発想』、『国文学解釈と教材の研究』1
- 藤川照三(1973)『似る』『通ふ』『おぼゆ』—宇治十帖を中心にして—『河』5
- (1979)『源氏物語における「似テイル」という表現について』『河』13
- 松尾 聡(1959)『覚え給ふ』の語義』、『講座解釈と文法3、源氏物語・枕草子』明治書院
- 柳 椿姫(1996)『おぼゆ考』—『源氏物語』を中心として—、『日本語と日本文学』22